

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：14601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02679

研究課題名(和文) 英語での授業、リキャスト、自己修正についての先導研究

研究課題名(英文) Research on English lessons in English, recasts and self-initiated, self-repair

研究代表者

佐藤 臨太郎 (Sato, Rintaro)

奈良教育大学・英語教育講座・教授

研究者番号：50509198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：3年間の研究期間において、6編の研究論文を出版することができ、当初の計画以上の研究成果を上げることが出来た。得た知見としては、生徒の誤りに対して与えるさりげなく正しい表現を示すフィードバックであるリキャストの効果については、学習者がすでに関連する語彙や文法の知識がある場合は、誤りに気づき訂正することが出来るが、知識がない場合は学習者に気付かれない場合が多いことが分かった。また、学習者は自分で自らの誤りを訂正しようとするが、文法については項目の難易度に関わらず、修正を試みようとする傾向にあるようである。フィードバックの効果は、教師がゼスチャーを伴い与えた場合に高くなることも判明した。

研究成果の概要(英文)：During the research period, I published six academic papers on the topic, which is more than I had expected. Through the research I found: recasts can be noticed by the students who made mistakes mainly when they already have explicit knowledge about the target linguistic aspects, and if they do not have the knowledge recasts may not be noticed by them; Japanese student are likely to self-initiate to self-repair their errors or mistakes regardless of the difficulty of the grammar to which they made mistakes: the effect of feedback by the teachers can be enhanced when it is accompanied by gestures. During the research period I gave a lot of practical pedagogical suggestions in the conferences and workshops.

研究分野：英語教育

キーワード：フィードバック リキャスト 英語での授業 英語を話そうとする意欲

1. 研究開始当初の背景

英語での授業をより効果的に行い、学習者の英語で話そうとする意欲を高めるために、リキャストなどのフィードバックの効果、学習者の自己修正行動の分析を行うことが課題であった。

2. 研究の目的

高校では英語での授業が基本となり、学習者のより多くの英語使用も求められている。しかしながら、日本人英語学習者は一般に英語での発話に自信がなく、また英語での発話に不安も大きい。また、英語での会話で間違いをおかした際に、教師から明示的な訂正やフィードバックを受けると、会話を続ける意欲を失ってしまう現象もみられる。本研究では、主に英語での授業において、1) 生徒の誤りを生かしながら文脈の中でさりげなく与えられる暗示的な訂正であるリキャストが、どのように生徒に誤りを気づかせ修正させることができるか、2) 生徒が英語での会話において、自分の発話の中に自ら問題点を見だし自分で修正する「自己修正」をどのように成功させるのか、さらに3) 英語での授業における教師からのリキャストなどの訂正やフィードバックが生徒の英語学習へ動機づけにどの程度貢献するのかを検証する。

3. 研究の方法

当初の計画は、以下であった。「英語での授業における、リキャストと自己修正の学習への効果と、フィードバックの動機づけへの効果を解明するため、以下の3項目を行う」

- ・リキャストの英語習得における役割と効果、さらに「英語で行う授業」でのリキャストの効果的利用への提言。

- ・自己修正現象の解明と英語習得における役割と効果、さらに「英語で行う授業」での自己修正へ効果的活用への提言。

- ・「英語での授業」におけるリキャストやフィードバックの学習者への動機づけへの効果・影響の解明。

これに加えてさらに、教師のゼスチャーなどの非言語コミュニケーション手段のフィードバックへの効果への影響、教師自身の英語を話す意欲の授業内での変動を検証することを加えた。

4. 研究成果

3年間の研究期間において、6編の研究論文を発表することができ、当初の計画以上の研究成果を上げることが出来た。以下、成果について説明していく。

(1)現在、高校での英語の授業は主に英語で行うことになっている。しかしながらこの「英語での授業」には一部の英語教育研究者

から、効果が無いばかりか害があるとの強烈な反対意見もある。たとえば、英語での授業を強いると、教師が疲弊してしまう。多くの学習者が授業を理解できなくなる。日本語で授業をおこない、生徒に英語での発話を促したほうが良いというような主張がされている。これに対して、理論と実践面から、英語での授業の効果について論じた。具体的には、第2言語習得理論において、多くの英語のインプットを与えることが、言語習得には不可欠であり、学習者の言語能力の若干上のレベルのインプットの必要性を主張した。また自身の先行研究を再分析し、英語で授業を行うことが生徒の「英語でコミュニケーションしたい」という動機づけを高めるという事実をしめした。実践面においては、選択的に効果的に日本語を用いながら、主に生徒に分かり易い英語で授業を進めて行く上での留意点をまとめた。これらは、本研究の妥当性に関わる重要な問題であり、学術論文として出版することが出来た。

(2)次に3人の中級レベルの大学生英語学習者のリキャストへの認識を検証した研究の成果を述べる。リキャストの例は以下である。

Student 1: I like childs very much.

Researcher: Oh, you like children very much.←

recast

Student 1: Yes. I like children very much, so I wanted to teach them how to play the piano.

Researcher: Did you actually do it?

学生1の誤りに対して、研究者がさりげなく正しい表現をコミュニケーションの流れの中で与え、学生は自分の間違いに気づいて正しい表現に修正している。この例では、学生には気づきが起こり、childをchildrenに修正して発話することが出来たのであるが、この気づきがどのような状況で起こるのかを検証したのが本研究である。研究課題は、学習者のリキャストへの気づきが以下のそれぞれの状況で、はたして起こっていたのかを検証することである。1)学習者が修正に成功したとき 2)同じ誤りを繰り返したり、違う誤りを犯したとき 3)反応しなかったとき 4)発話ではなくyesと言ったり、頷いたりしてrecastを承認したとき。

3人の研究参加者と研究者が1対1で英語での会話を行い、参加者の英語の間違いにリキャストが与えられた。これらのやり取りはすべて録画され、書き起こされ、上記の1)から4)の状況に分類された。その後、録画された会話を参加者と、研究者で見ながら、リキャストが与えられた時に、参加者に気づきがあったのかどうか、検証された。その結果、以下のことが判明した。

1) 学習者が修正に成功したとき 気づきが起きている

- 2) 同じ誤りを繰り返したり、違う誤りを犯したとき 気づきは起こっていない
- 3) 反応しなかったとき 気づきは起こっていない
- 4) 発話ではなく yes と言ったり、頷いたりして recast を承認したとき 気づきは起こっていない。

以上の結果から、学習者がリキャスト後、正しく修正していない場合は、学習が進行していないことが示唆され、そのような場合は、教師は明示的なフィードバックを与える必要があるという提案がなされた。

(3)学習者の自己修正についての研究成果を述べる。 以下が自己修正の例である。

I go (trigger)... um (self-initiated part) went to his house yesterday.

この例では、went というべきところを、go と言ってしまったが、発話者は自分で過ちに気づき修正している。本研究は、1)自己修正の発生率は文法の難易度により違いがあるか 2)自己修正の成功率は文法の難易度により違いがあるかを調べたものである。文法の難易度のランク付けについては、先行研究を参考に2つの基準が設けられた。

Early developmental (easy)

1. Definite article (the)
2. Irregular past tense
3. Plural S

Late developmental

1. Indefinite article (a, an)
2. Regular past tense
3. Relative clauses
4. Active and passive voice
5. Third person singular S

(Categorization A)

Early developmental (easy)

1. Progressive(-ing)
2. Plural S, Be copula,
3. Be auxiliary
4. Progressive S

Late developmental (difficult):

1. Irregular past tense,
2. Regular past tense,
3. Third person singular S
4. Articles (a.the)

(Categorization B)

対象とする学習者は32名の高校生で、研究者と各生徒の発話がすべて録画され、書き起こしたデータが分析された、その結果、学習者の自己修正の発生率、成功率ともに、対象となる誤りの文法的な難易度に左右さ

れないことが分かった。このことから、教師は生徒が誤った発話をした後にすぐにそれを指摘せず、自己修正させる機会を与えるべきであるという示唆が得られたが、上記の2つの文法項目難易度分類基準の妥当性や、学習者への回顧インタビューが行われなかった等の課題もあり、今後のさらなる研究の必要性があるといえる。

(4) リキャストへの気づきの違いについては、その種類、学習者の過ちからの修正点が1か所か複数か、またリキャストそのもの長さの違いの観点からも分析・検証された。本研究の研究課題は以下である。

1) リキャストの種類、つまり、文法に関してか、語彙か、発音かにより、学習者の気づきに違いはあるか。2)修正点の違いにより、気づきに違いはあるか 3)リキャストの長さにより、気づきに違いはあるか。

これは、(1)の研究によって得られたデータを研究課題に沿って分析したものである。種類による気づきの頻度は、発音 語彙 文法という順になり、先行研究と同様であった。修正点の違いによる影響は、修正点1か所と複数では気づきに違いは見られなかった。また、リキャストの長さについても、長短が気づきに影響を与えることはなかった。これらは先行研究とは相反する結果である。リキャストを与える場合、発音 語彙 文法の順に効果がありそうであるとの示唆が得られたが、今回の参加者が、3人のみの日本人学習者としては熟達度の高い学習者であるので、リキャストの修正箇所の数とその長さの気づきへの影響はさらなる研究が必要である。

(5)英語で授業を実践するにおいて、教師自身の英語でコミュニケーションしようとする意欲(Willingness to Communicate: WTC)が高いことが前提になる。また、授業中においてWTCが常に高い状態であることが理想である。本研究においては、ほぼ英語で授業を行っている教師のWTCの変動を発話ごとに調べ、変動があった場合の理由について調べた。研究課題は以下である。1)日本の英語教師のWTCは授業に変動するか 2)もしそうであるなら、その理由は何か。

研究対象者は授業をほぼ100%英語で行っている高校英語教師である。彼が行った高校2年生対象の授業を録音・録画し、すべての発話を書き起こした。教師はその後、ビデオを見ながら、すべての発話それぞれにおけるその時のWTCの高さ(低さ)を点数化していった。さらに研究者とともにビデオとそれぞれの発話のWTCスコアを見ながら、動きがあった場合の理由を述べていった。分析の結

果、50分間の授業において、教師のWTCは高低ともに頻繁に変動していた。上昇した理由として代表的なものは 自己表現する機会であった 英語で話さなければという義務感を感じた 英語で表現することにやりがいを感じた、が上げられ、逆に意欲が下がった理由としては、日本語での説明の方が効果があるのではないかと感じた 自分の英語に自信がなかった 生徒からの反応がなかった、等が上げられた。一人の教師を対象とした分析であるので、結果の一般化はできないが、ほぼ英語で授業を行っている熟達度の高い教師でさえも、授業中においてWTCが変動し、下がることもあるということから、教師自身のWTCを上げ、その状態を保つための方策について、より研究していく必要があるといえる。

(6)英語での授業におけるゼスチャーの役割について分析した。3人の教師の授業を記録し、分析した結果、英語使用の頻度が高いほど、ゼスチャーの使用頻度が高いこと、授業内容、生徒のレベルにより、使用するゼスチャーの種類に違いがあること、同一の教師であっても、英語を使用しているときにより多くゼスチャーを用いていることが分かった。さらに、フォードバックを与える際にゼスチャーが伴った場合の方が、生徒の理解を促しやすいということも判明した。これらの結果から、英語で授業を行う際においては、ゼスチャーなどの非言語コミュニケーション方略を効果的に用いるべきであるといえる。

5 . [雑誌論文] (計 6 件)

主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

Sato,R.(2018).Examining EFL Teachers' Non-verbal Behaviors in English-medium Lessons. *The Journal of Asia TEFL*.15, 82-98. 査読あり
<http://dx.doi.org/10.18823/asiatefl.2018.15.1.6.83>

Sato,R.(2017) Fluctuations in an EFL teacher's willingness to communicate in an English-medium lesson: an observational case study in Japan. *Innovation in Language Learning and Teaching*. (published on line) 査読あり
<https://doi.org/10.1080/17501229.2017.1375506>

Sato,R.(2016) Exploration into the Effects of Recast Types on Advanced-Level Japanese EFL Learners' Noticing. *Electronic Journal of Foreign*

Language Teaching.13. 26-274. 査読あり
<http://e-flt.nus.edu.sg/v13n22016/sato.pdf>

Sato,R & Takatsuka,S.(2016).The Occurrence and the Success Rate of Self-Initiated Self-Repair. *TESL-EJ*. 20.1-15. 査読あり
<http://www.tesl-ej.org/wordpress/issues/volume20/ej77/ej77a4/>

Sato,R.(2016).Examining. High-intermediate Japanese EFL Learners' Perception of Recasts: Revisiting Repair, Acknowledgement and Noticing through Stimulated Recall. *Asian EFL Journal*, 18,109-129. 査読あり
<https://www.asian-efl-journal.com/9452/quarterly-journal/volume-18-issue-1-march-2016-quarterly-journal/>

Sato,R.(2015).The Case Against the Case Against Holding English Classes in English. *The Language Teacher*,39,15-18. 査読あり
<http://www.jalt-publications.org/tlt/articles/4769-case-against-case-against-holding-english-classes-english>

[学会発表] (計 8 件)

Sato, R. (2017). "Examining EFL teachers' use of non-verbal behaviors as teaching strategies in English-medium lessons" The Second International Conference on Situating Strategy Use: Present Issues and Future Trends (ギリシャ 2017,9.28)

Konno, K, Koga, T., & Sato, R.(2017). "Variations in L2self and WTC: Effects of teachers' nationality and instructional languages" 1st International Conference on New Trends in English Language Teaching and Testing (UAE 2017, 8.24)

Sato, R. (2017). "Considering the roles of gestures in English lessons in English: Are they really helpful?" 第43回全国英語教育学会島根研究大会 (島根 2017, 8.20)

Sato,R. (2016). "Conducting English lessons (almost) all in English and the judicious use of the Japanese language" Kyoto JALT (京都市, 2016,10.8)

Sato, R. (2016). "Examining EFL teachers' non-verbal behaviors in English medium lessons" EuroSLA 2016 (フィンランド 2016, 8.25)

Sato,R.(2016). “Considering effective approaches which can increase learners’ motivation in the Japanese EFL learning environment”
神戸市中学校教育研究会英語部会 (神戸市 2016,5.6)

Sato,R.(2016).“Examining High-intermediate Japanese EFL Learners’ Perception of Recasts”
2nd Joint International Methodology Research Colloquium (那覇市 2016, 2.16)

Sato,R. (2015). “Exploration into the effects of recast types on advanced-level Japanese learners’ noticing”
第41回全国英語教育学会熊本研究大会 (熊本市 2015, 8.22)

〔図書〕(計 1 件)

笠原究 佐藤臨太郎 金星堂 英語テスト作成入門 効果的なテストで授業を変える!
2017,253

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤臨太郎 (SATO, Rintaro)
奈良教育大学・英語教育講座・教授

研究者番号：50509198

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()